

小学生におけるウェルビーイングと共同体感覚の関連

目 黒 幸士郎*・水 流 卓 哉**・赤 坂 真 二***

(令和6年10月9日受付；令和6年10月23日受理)

要 旨

本研究は、子どものウェルビーイングの向上にかかわり、小学生が学校生活における幸せをどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とした。具体的に、共同体感覚と主観的幸福感の関連について仮説モデルを共分散構造分析での検討と、学校生活における幸せについての自由記述をKHcoderを用いたテキスト計量分析を行った。その結果、共同体感覚と主観的幸福感に強い正の関連が示され、子どもたちは、友達とのつながりを幸せと捉えていることが明らかとなった。本研究において、共同体感覚を高めることで、ウェルビーイングの向上が図られる可能性が示された。

KEY WORDS

ウェルビーイング 主観的幸福感 共同体感覚

1 問題の所在と目的

人間の心の豊かさに関する概念としてウェルビーイングが注目されている。直訳すると「幸福」などと訳されるが、世界保健機関(WHO)の憲章(日本WHO協会, 2019)では「肉体的, 精神的, 社会的, 全てにおいて満たされた状態にあること」と定義されている。「well=よい」と「being=状態, あり方」が組み合わせられた言葉であり、「よい状態」と進行形であることから瞬間的な幸福ではなく持続的に幸福であることを意味している⁽¹⁾。白井(2020)によれば, OECD(経済協力開発機構)がプロジェクトしている, 「OECD Future of Education and Skills 2030(学びの羅針盤)」では「教育の目的は, 個人のウェルビーイングと社会のウェルビーイングの実現である」と提唱しており, また, 2015年国連で採択された「SDGs: 2030年までの持続可能な開発目標」においてもウェルビーイングは重要な達成目標のひとつとして挙げられているとしている⁽²⁾。

日本国内では, 2023年に次期教育振興基本計画が中央教育審議会に取りまとめられ, 2040年の日本社会を視野にいたれた教育のあり方をめぐる議論では「(社会)変革を起こすコンピテンシー」や誰も取り残されない社会に加えて, 個人と社会全体のウェルビーイングの実現が取り上げられ, より良い社会を目指していくために, 公教育においてウェルビーイングを実現していくための取り組みを行う必要があるとしている(文部科学省, 2023)⁽³⁾。「次期教育振興基本計画について(答申)」では, 「日本社会に根ざしたウェルビーイングを教育を通じて向上させていくことが重要であり, その結果として特に子供たちの主観的な認識が変化したかについてエビデンスを収集していくことが求められる」としている(文部科学省, 2023)⁽⁴⁾。さらに, 文部科学省(前掲)では, OECDによるウェルビーイングの枠組みについて見直しが行われ, 独自の「日本型ウェルビーイング」が提案されている。そこでは, 日本では人との「つながり」や「かかわり」に満足度を得るとの指摘がみられる。また, 相互依存のかつ相互承認的な人間関係をウェルビーイングと関連づける指摘もみられる⁽⁵⁾。

次期教育振興基本計画(文部科学省, 前掲)では, 「ウェルビーイングとは身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい, 短期的な幸福のみならず, 生きがいや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含む概念」と定義し, その要素として, 「幸福感(現在と将来, 自分と周りの他者)」「学校や地域でのつながり」「協働性」「利他性」「多様性への理解」「サポートを受けられる環境」「社会貢献意識」「自己肯定感」「自己実現(達成感, キャリア意識など)」「心身の健康」「安全・安心な環境」などを挙げている⁽⁶⁾。また, 櫻井(2022)は, ウェルビーイングを「主観的幸福感と客観的な生活・社会環境の両面に着目した価値観」としている⁽⁷⁾。学校教育でのウェルビーイングについて, 田村ら(2024)は, 学校の成果指標は学力向上や合格率であり, それらはウェルビーイングの客観的な側面の一部ではあるが, 私たちは学校生活における児童生徒の主観的な幸福により注目する必要があると主張している⁽⁸⁾。これらのことから, ウェルビーイングは幅広い概念であるが, 主観的幸福感がウェルビーイングに大きく寄与すると捉

*栃尾東小学校 **富士見小学校 ***学校教育学系

えることができる。

しかし、ユニセフ・イノチェンティ研究所が発表した報告書『レポートカード 16－子どもたちに影響する世界：先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か(原題：Worlds of Influence: Understanding what shapes child well-being in rich countries)』によると、日本の子どもの幸福度は38カ国中20位という結果であった。分野毎の内訳を見ると、身体的な健康は1位でありながら、精神的な幸福度は37位という、両極端な結果が混在する状況が明らかとなった。また学校への帰属意識が高い子どもの方が、学力や生活満足度が高いという結果や、帰属意識が低い子どもたちの中で、生活満足度が高い子どもは約40%と調査対象国の中で、最も低い割合であったことが報告されている⁽⁹⁾。

つまり、教育におけるウェルビーイングの重要性が主張され、そのウェルビーイングに寄与する要因として主観的幸福感に注目されている一方で、日本の子どもの幸福度、特に学校における幸福度が低いことが明らかにされている。これらのことから、子どもが1日の大半を過ごす学校生活において、ウェルビーイング(幸福)を主軸に置いた学校・学級づくりが必要であることが考える。

露口(2017)は、学校における幸福感研究が今日の教育分野における重大関心事でもあると主張し、教育分野の幸福研究における、幸福の定義、幸福の構成要素、測定方法、幸福の決定要因等についての理論本盤が必要であるとしており⁽¹⁰⁾、岡山(2023)も、子ども自身が「幸せ」の意味を、どのように捉えているのか明らかにすることが求められると示している⁽¹¹⁾。これらのことから、学校教育における、子ども自身が捉える幸福について検証していく必要があると考える。

子どもの主観的幸福感について、露口(前掲)は、子どもを取り巻く友達とのつながりが学校での主観的幸福感を高めることを示唆した⁽¹²⁾。岡本(2019)は、学校での幸福感について、量的調査を行い、「学級での子ども同士のつながり」が最も重要であることを明らかにしている⁽¹³⁾。友達などの周囲の人とのつながりを重視した概念に共同体感覚が挙げられる。阿部田ら(2017)は、家族・友人・仕事と主観的幸福感の関連について調査し、交友における共同体感覚が高まるほど、主観的幸福感に正の影響を及ぼすと考えられるとしている⁽¹⁴⁾。共同体感覚について岸見(2010)は、他者とのつながりの中で、他者に貢献できていると感じられること、他者と相互貢献関係であると感じられることと述べ⁽¹⁵⁾、さらに、会沢(2008)は、お互いが尊敬し合う関係で信頼感や安心感で満たされ、お互いが協力原理で結ばれている意識と説明している⁽¹⁶⁾。このように、共同体感覚の定義は曖昧であるとした上で、石丸・池田(前掲)は、共同体感覚を「他者とのつながりを重視する」と捉えている⁽¹⁷⁾。佐藤(2016)は、共同体感覚の高まりが子どものウェルビーイングに正の相関を持つことが仮定できると主張している⁽¹⁸⁾。つまり、子どもの共同体感覚の高まりが子どもの主観的幸福感の高まりにつながり、子どものウェルビーイングの向上にも影響があると捉えることができる。

これらのことから、共同体感覚とウェルビーイング(主観的幸福感)には、相互関係があることが推察できる。しかし、これらの主張は、理論研究に留まっており、実践的・実証的に研究で明らかにしているものは管見の限り見られない。

以上のことより、本研究では、小学生のウェルビーイングに他者とのつながりを重視した感覚である共同体感覚が大きな影響を与えていると仮説を立て、ウェルビーイングを主観的幸福感として測定した。そして、学校教育におけるウェルビーイング(主観的幸福感)と共同体感覚との関係を示す仮説モデルを作成し(図1)、関連を検討することで学校教育における子どものウェルビーイングに対する認知を明らかにし、今後の日本の学校教育が目指す子どものウェルビーイングの向上に寄与することを目的とする。



図1 主観的幸福感と共同体感覚の関連を示す仮説モデル

2 方法

2. 1 調査期間

2023年11月30日～2024年1月31日

2. 2 対象学級

A県内の公立小学校の4, 5, 6年生, 全32学級, 871名(男子429名, 女子442名)を調査対象とした。なお, 質問紙に回答した児童のうち, 欠損値の見られなかった847名を分析対象とした(有効回答率97.2%)。

2. 3 調査方法と倫理的配慮

調査は, 学校長, 教頭, 教務主任, 生徒指導主任, 学年主任, 学級担任に承諾を得た上で, 学級ごとに質問紙による調査を実施した。調査を実施するに当たり, 学級担任には同封されている実施の手順, 注意事項のプリントに沿ってアンケートを実施することを依頼した。また, 倫理的配慮として, この調査は学校の成績に関係がないこと, 回答は強制ではなく回答しなくても不利益を被らないこと, 回答は担任教師を含め教職員に見られることなく, データ処理されること, データ処理後は, 一定期間管理後, 適切に破棄することをフェイスシートに明記し, 回答前に学級担任が口頭でも説明を加えた。さらに, 調査用紙を回収する際には, 質問紙は後ろ向きにして学級担任が回収し, 児童に余計な不安を与えることがないように配慮した。これらの手順を踏まえて, 回答内容が学級担任および級友に見られないように配慮した。なお, 内容および実施に関して学校から問題点の報告はなかった。

2. 4 調査・分析方法

2. 4. 1 【分析1】主観的幸福感尺度

澤田(2013)は, Keyes, Shmotkin, & Ryff(2002)による, ウェルビーイングは主観的幸福感の側面からもなるという指摘から, 看護師を対象としたウェルビーイングに関連する要因調査において, 主観的幸福感尺度の下位因子を含むアンケート調査を実施している⁽¹⁹⁾。また, 日本における, 幸福感研究について外観し, 動向を整理した中坪ら(2021)によると, 日本の幸福感研究で最も多く使用された幸福感尺度は「主観的幸福感尺度」であると示されており⁽²⁰⁾, 伊藤ら(2003)が作成し, 妥当性が認められている「主観的幸福感尺度」を本研究においても使用した⁽²¹⁾。本尺度は, 「満足感」, 「自信」, 「達成感」, 「失望感」, 「至福感」の各5因子, 計15項目から捉えようとするものであり, 児童の幸福に対する認知を測定する際に適したものであると考えられる。しかし, 本尺度は, 大人を対象に作成されたものであるため, 文言については, 筆者以外にも現職院生2名と協議し, 対象学級の担任とも検討を行い, 一部改良して実施した。その後は, 尺度の改定に伴って信頼性が損なわれていないかどうかを確認するために, Cronbachの α 係数を算出した。その結果, 下位項目の「満足感」($\alpha=.80$), 「自信」($\alpha=.74$), 「達成感」($\alpha=.70$), 「失望感」($\alpha=.71$), 「至福感」($\alpha=.75$)において, 十分な内的一貫性が得られたため, 本研究においても使用できると判断した。なお, 測定にあたっては, 伊藤ら(前掲)に倣って「今の自分の思いに当てはまるところ1つに○をつけてください」という教示文のもと, 「1. そう思わない」, 「2. あまりそう思わない」, 「3. そう思う」, 「4. とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。

2. 4. 2 【分析2】小学生版共同体感覚尺度

学生の共同体感覚測定を目的として開発された日本語版の心理尺度はいくつか存在するが, (橋口, 2012; 高坂, 2014; 石丸・池田, 前掲2017), 一般に公開されている尺度としては, 前者2名によって作成されたものである⁽²²⁾⁽²³⁾⁽²⁴⁾。これらの比較・検討を行った池田・富田(2023)は, 橋口(前掲, 2012)による尺度に対して「2因子10項目とさまざまな学校場面を想定するにはやや少ない」ことや「回答者が共同体感覚をもちながら実際に他者とどのように関わっているのかを測る尺度とは言い難い」と指摘している⁽²⁵⁾。

一方で, 高坂(前掲, 2014)による尺度には「貢献感」, 「所属感・信頼感」, 「自己受容」の, 3因子がともに中程度の相関を示していることや, 客観的な視点から他者に対する具体的な行動を問う項目が含まれている。以上のことから, 本研究では高坂(前掲, 2014)による「小学生版共同体感覚尺度」を援用することが適していると判断した⁽²⁶⁾。

本尺度は, 小学校4・5・6年生を対象に作成されたものであり「貢献感(4項目)」, 「所属感・信頼感(5項目)」, 「自己受容(4項目)」の, 3因子13項目で構成されている。なお, 測定にあたっては, 高坂(前掲, 2014)に倣って「次の文章は, あなたにどのくらいあてはまりますか」という教示のもと, 「1. あてはまらない」, 「2. あま

りあてはまらない」、「3.どちらともいえない」、「4.ややあてはまる」、「5.あてはまる」の5件法で回答を求めた。

本研究では、「主観的幸福感」と「共同体感覚」の関連を検討するにあたり、生活満足度と共同体感覚の関連について調査した石丸・池田(前掲)に準拠し⁽²⁷⁾、図1の仮設モデルを構築し、共分散構造分析により検証した。

2. 4. 3 【分析3】学校における幸せについての自由記述分析

看護師を対象としたウェルビーイングに関連する要因調査において自由記述アンケート調査を実施した田中・布施(2022)に倣って⁽²⁸⁾、「学校生活で幸せを感じることや時はどんなこと(時)ですか」と教示文を設け、自由記述アンケートを実施した。871名を調査対象とし、未記入を除いた822名を分析対象とした(有効回答94.3%)。

なお、分析に際しては、分析者による理論や問題意識によるバイアスを明確に排除できるよう樋口(2020)が開発したフリー・ソフトウェア「KH Coder3(3.Beta.03i)」を用いて計量テキスト分析を行った⁽²⁹⁾。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法である。樋口(前掲)はインタビューなどのテキスト型データに計量テキスト分析を用いる利点として、信頼性および客観性を向上させること、データの全体像や概観を描くのに適していると報告しているため、自由記述をテキスト形式に変換し、出現頻度の高い語を抽出した共起ネットワークを作成し、分析を行った⁽³⁰⁾。

3 結果と考察

3. 1 「主観的幸福感尺度」の因子分析結果

表1 主観的幸福感尺度の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転, $n=847$)

項目	因子負荷量					h^2
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	
第 1 因子 満足感 ($\alpha=.80$)						
1 あなたの毎日には、楽しいことやおもしろいことがありますか	.80					.64
3 今の生活は、昔と比べて楽しいですか	.78					.61
2 小学校生活は楽しいですか	.71					.50
第 2 因子 自信 ($\alpha=.74$)						
4 ものごとが思ったように進まない時、あなたはうまく乗り越えることができますか		.81				.66
6 大変な場面にあった時、勇気を出して立ち向かっていけると感じますか		.79				.62
5 困ったことが起きた時、自分で解決できると思いますか		.52				.27
第 3 因子 達成 ($\alpha=.70$)						
7 これまでの学校生活で、めあてや目標を達成することができていると感じますか			.78			.61
8 これまでの学校生活で成長していると感じますか			.70			.48
9 自分がやろうとしたことは、やりとげていますか			.43			.18
第 4 因子 失望感 ($\alpha=.71$)						
10 自分の人生には、ワクワクすることがないと感じますか				.85		.72
11 将来のことが心配に感じますか				.69		.47
12 あなたの生活は楽しくないと感じていますか				.50		.25
第 5 因子 至福感 ($\alpha=.75$)						
13 自分は周りの人にとって欠かせない人だと感じていますか					.80	.65
14 とても強く幸せを感じる時はありますか					.74	.55
15 このクラスの一員でよかったと思うことがありますか					.49	.24
因子間相関						
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	
	F 1	—				

本研究において使用した「主観的幸福感尺度」については、成人を対象に作成されたものであるため、文言については、筆者および第二筆者、第三筆者とメンバーチェッキングを行い、小学生に適した文言に一部改良して実施した。その後は、尺度の改定に伴って信頼性が損なわれていないかどうかを確認するために、山本ら(2021)の手順と同様に元の因子構造を参考にして確認的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った⁽³¹⁾。

確認的因子分析モデルの適合度指標はGFI=.899, AGFI=.848, CFI=.880, RMSEA=.097, AIC=800.738であったため、本研究において許容できる範囲内の値であると判断した(表1)。

3. 2 共分散構造分析(「主観的幸福感尺度」「共同体感覚尺度」)

「主観的幸福感尺度」の下位因子である、「満足感」「自信」「達成感」「失望感」「至福感」の誤差間、「共同体感覚」の下位因子である、「貢献感」「所属・信頼感」「自己受容」の誤差間の共分散を仮定し、「満足感」「自信」「達成感」「失望感」「至福感」から「主観的幸福感」および「共同体感覚」,「貢献感」「所属・信頼感」「自己受容」から「共同体感覚」および「主観的幸福感」へのパスについて共分散構造分析を行った。結果、図2に示したモデルが作成され、モデル適合はAGFI=.906, CFI=1.000, RMSEA=.70であり、本モデルは受容できると判断した。なお、性差が生じていないかを確認するため、男子のみ、女子のみで共分散構造分析を行った。結果、図3、図4に示したモデルが示され、モデル適合度はそれぞれAGFI=.705, CFI=1.000, RMSEA=.122, AGFI=.702, CFI=1.000, RMSEA=.124であり、本モデルは受容できると判断した。

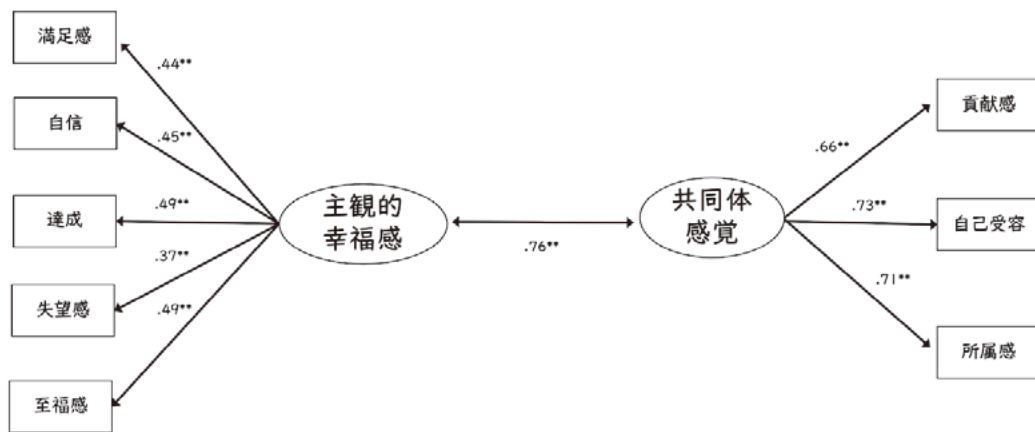


図2 主観的幸福感と共同体感覚の関連(全体)

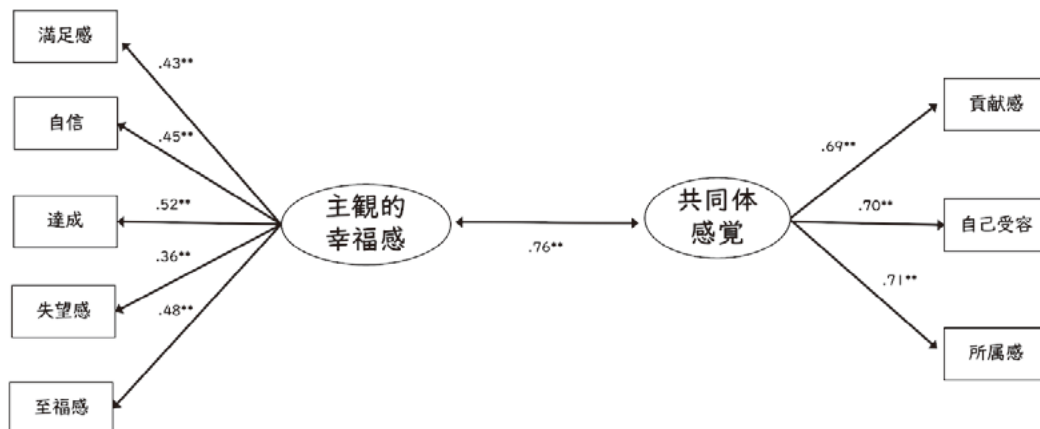


図3 主観的幸福感と共同体感覚の関連(男子)

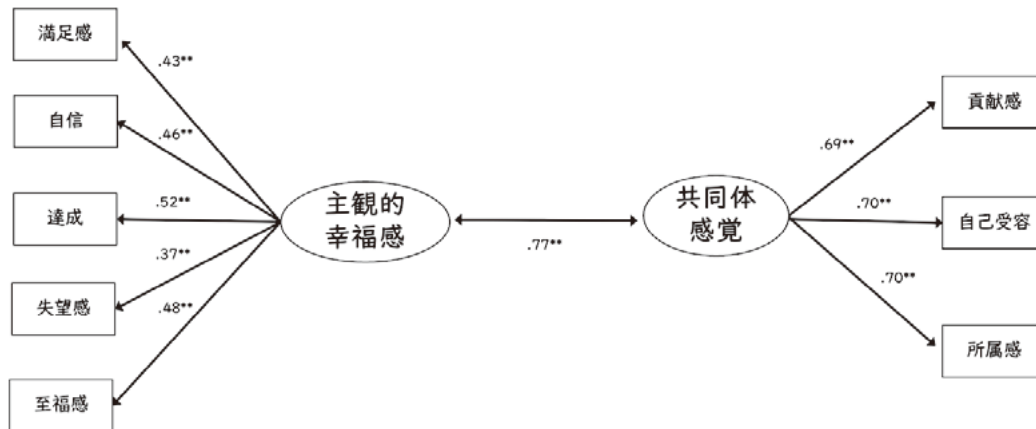


図4 主観的幸福感と共同体感覚の関連(女子)

3. 3 学校生活における幸せに関する自由記述分析

表2 記述の頻度語

	頻出語	出現回数
1	友達	415
2	遊ぶ	186
3	話す	62
4	笑う	60
5	先生	51
6	楽しい	50
7	協力	42
8	クラス	35
9	話	33
10	好き	31
11	勉強	30
12	遊べる	29
13	時間	28
14	休み	24

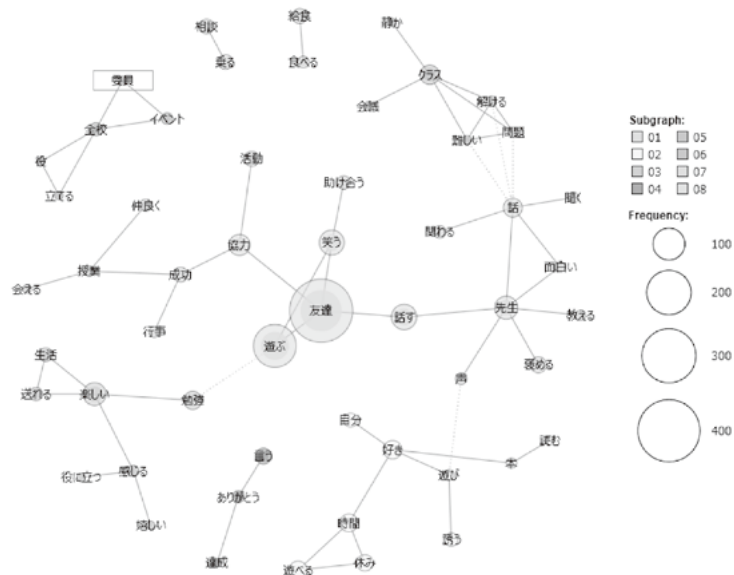


図5 自由記述の共起ネットワーク

「学校生活における幸せと感ずることや時は、どんなこと(時)ですか」という教示文のもと、自由記述を求めた。そして、自由記述をKH Coderで分析し、頻度表を作成した(表2)。図5の共起ネットワークは、よく一緒に用いられていた語のペアを線で結んだ図である。なお、強い共起関係ほど濃い線として描かれ、出現数が多い語ほど、円が大きくなっている。

表2からは、「友達」「遊ぶ」「話す」「笑う」など、友人との関わりについて考えたことを示す単語が多く抽出された。また、図5の共起ネットワークからも、「友達」「遊ぶ」「話す」や「笑う」「協力」の語の結びつきが示され、実際の子どもの記述からは、「友達と一緒に遊ぶこと」「友達と話をすること」「友達と楽しい話をして笑っていること」「クラスみんなで行事のために協力すること」「クラスみんなで、難しい問題を解くことができた時」などが見られた。子どもを取り巻く友達とのつながりが学校での主観的幸福感を高めると露口(前掲)は指摘していることから⁽³²⁾、子どもは、友達との関わりを学校生活における幸せと捉えていることが窺える。

また、自由記述には、「全校のみんなの役に立つことができた時」「先生や友達から、ありがとうと言ってもらえること」などの他者に貢献することについての記述も見られた。橋口(2017)が、他者への貢献感が主観的幸福感に正の関連があることを示していることから⁽³³⁾、他者に貢献できたことを実感できることも学校での主観的幸福感の向上に必要であることが考えられる。

このように他者とのつながりを学校生活における幸せと捉えている記述が、有効回答数822名のうち、707名(86.0%)確認できた。露口(前掲)が、子どもを対象とする幸福感研究では、子どもを取り巻く人々とのつながりが主観的幸福感の主たる決定要因であるとしていることから⁽³⁴⁾、子どもたちは、学校生活における幸せを「他者とのつながり」と捉えることの可能性が示唆された。

4 総合考察

本研究は、子どもが学校生活におけるウェルビーイング(幸福)をどのように捉えているのかを検討するため、共同体感覚と主観的幸福感の関連仮説モデルを検証することを目的とした。その結果、共同体感覚と主観的幸福感に有意な正の相関が示された。このことから、阿部田ら(2017)の交友における共同体感覚の高まるほど、主観的幸福感に正の影響を及ぼす⁽³⁵⁾という仮説や、佐藤(2016)の共同体感覚の高まりが児童のウェルビーイングに正の相関を持つことが仮定できる⁽³⁶⁾という仮説が支持されたと考えることができる。

また、共同体感覚と主観的幸福感に強い関連が示されたことから、主観的幸福感・ウェルビーイングを高める取り組みとして、共同体感覚の育成が有効であることが推察できる。

さらに、「学校生活で、幸せを感じることや時はどのようなこと(時)」に関する児童の自由記述を、樋口(2020)によるKH Coderを用いて意識傾向を分析したところ、最も多く抽出された語は、「友達」415語であった。特に「友達と遊んでいる時」「友達と話をすること」「友達と休み時間に遊んだり話したりすること」「友達と笑い合っている時」など、友達との関わりに関することが多く述べられていた。大学生を対象に人間関係と幸福感の結びつきについて検討した内田ら(2018)が、他者との良質な交流が幸福感に寄与する可能性を示唆していることから⁽³⁷⁾、他者との関わりが幸福感に大きな影響を与ええると言える。また、「全校のみんなの役に立てたと感じた時」「誰かからありがとうと言ってもらえた時」「助けを求められた時」など、他者に貢献できることに関する記述も見られた。成人を対象に主観的幸福感を調査した島井ら(2004)は、社会に貢献しているという自覚があり、いきいきと活動している人において、幸福感が高いという結果を報告している⁽³⁸⁾。このことから、他者に貢献感を感じている子どもは、幸福感が高いことが窺える。

また、「友達」以外の人的要因として次に多く抽出された語は、「先生」であった。例えば、「先生が自分のことを褒めてくれた時」「先生に話を聞いてもらえた時」「先生が面白い話をしてくれること」などが見られた。学級集団における教師の影響について調査した三島・淵上(2010)は、学級集団、特に小学校段階では教師を潜在的な影響力として捉えていることを示していることから⁽³⁹⁾、教師が子どもの幸福感に影響する要因の一つとして捉えられることが示唆された。

向後(2014)は、アドラーの提案した概念である共同体感覚を育てていくことが、他者とのよい関係を作り、最終的には幸せにつながると述べていることから⁽⁴⁰⁾、本研究において、小学生における主観的幸福感は共同体感覚と強い関連があり、その中でも、特に友達とのつながりが大きな影響を与えている可能性が示唆された。すなわち、共同体感覚の高まりや共同体感覚に基づく友達とのつながりが、子どもの幸福感へと影響し、ウェルビーイングの向上に寄与する可能性が明らかとなった。

5 今後の課題

本研究を通して、小学生における学校生活のウェルビーイングは共同体感覚と強い関連があり、友達とのつながりが大きな影響があることが確認されたが、文部科学省(前掲)は、子どものウェルビーイングを教育を通じて向上させていくことが重要であり、特に子どもたちの主観的な認識が変化したかについてエビデンスを収集していくことが求められるとしている⁽⁴¹⁾。また、永島・小倉(2023)が、子どもの幸福な人生づくりに、学校がどのように関わっていくかが今日の重要な教育課題である⁽⁴²⁾と主張しているように、小学生を対象としたウェルビーイングを高める実践的・実証的研究は見当たらない。つまり、どのような教育活動が子どものウェルビーイングの向上に有効であるのかを、今後明らかにしていくことが重要である。

引用文献

- (1) 日本WHO協会：「世界保健機関憲章前文(日本WHO協会訳)」，2019
<https://japanwho.or.jp/about/whowhat/charter/> (2023年4月15日閲覧)
- (2) 白井俊：「OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来」，ミネルヴァ書房，2020
- (3) 文部科学省：「次期教育振興基本計画について(答申)【本体】」，2023
https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_oseisk02-000028073_1.pdf (2024年4月20日閲覧)
- (4) 文部科学省：「次期教育振興基本計画について(答申)【概要】」，2023
https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_oseisk02-000028073_2.pdf (2024年4月20日閲覧)
- (5) 前掲(3)
- (6) 前掲(4)
- (7) 櫻井義秀：「ウェルビーイングの社会学」，北海道大学出版会，pp.1-18，2022
- (8) 田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西川加名恵：「子どもと教師のウェルビーイングを実現するカリキュラム・マネジメント」，ぎょうせい，pp.1-17，2024
- (9) ユニセフ・イノチェンティ研究所：「レポートカード16-子どもたちに影響する世界：先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か日本語版(原題：Worlds of Influence: Understanding what shapes child well-being in rich countries)」，2020
<https://www.unicef.or.jp/report/20200902.html> (2023年5月15日閲覧)
- (10) 露口健司：「学校におけるソーシャルキャピタルと主観的幸福感「つながり」は子どもと保護者を幸せにできるのか？」，愛媛大学教育学部機構，第64巻，pp.171-198，2017
- (11) 岡山ひとみ：「子どものウェルビーイングを高める研修開発プログラム-成長し続けるチームとしての学校を目指して-」，学校改善研究紀要，pp.108-119，2023
- (12) 前掲(10)
- (13) 岡本千恵：「子どもの主観的幸福感を高める学級経営の実践的研究」，学校改善研究紀要，pp.54-71，2019
- (14) 阿部田恭子・柄本健太郎・向後千春：「ライフタスクの満足度と重要度および共同体感覚が幸福感に及ぼす影響」，日本心理学会81回大会，p.94，2017
- (15) 岸見一郎：「アドラー-人生を生き抜く心理学-」，NHK出版，pp.21-31，2010
- (16) 会沢信彦：「傷つきやすくチャレンジできない子どもたち」，金子書房，pp.12-19，2008
- (17) 石丸秀樹・池田誠喜：「共同体感覚と生活充実感の関連」，鳴門教育大学研究紀要，pp.29-39，2018
- (18) 佐藤文：「勇気づけの教室をつくる！アドラー心理学入門」，明治図書，pp.27-30，2016
- (19) 澤田忠幸：「看護師のウェルビーイングとコミットメント・職場の人間関係と関係性」，心理学研究，第84巻，第5号，pp.468-476，2013
- (20) 中坪太一郎・平野真理・綾城初穂・小嶋祐介：「幸福感尺度使用の現状と今後の展望」，淑徳大学研究紀要(総合福祉学部・コミュニティ政策学部)，第55巻，pp.141-158，2021
- (21) 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至：「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」，日本心理学研究，第74巻，第3号，pp.276-281，2003
- (22) 橋口誠志郎：「小学校(中・高学年)用共同体感覚尺度作成の試み-中核信念に焦点をあてて-」，学校メンタルヘルス，第15巻，第2号，pp.286-291，2012
- (23) 高坂康雅：「小学生版共同体感覚尺度の作成」，日本心理学研究，第84巻，第6号，pp.596-604，2014
- (24) 前掲(17)
- (25) 池田裕亮・富田英司：「共同体感覚に関する日本語版尺度の比較-子どもが不登校になるプロセスの理解に向けて-」，愛媛大学教育学部紀要，第70巻，pp.90-97，2023
- (26) 前掲(23)
- (27) 前掲(17)
- (28) 田中聡美・布施淳子：「病院に勤務する看護師の職務に対する幸福感の認識」，日本看護研究学会，第45巻，第1号，pp.105-120，2022
- (29) 樋口耕一：「社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-」，ナカニシヤ出版，2020
- (30) 前掲(25)
- (31) 山本琢俊・河村茂雄・上淵寿：「学級の社会的目標構造とクラスメイトへの自律的な向社会的行動との関連-小中学生の差異に着目して-」，教育心理学研究，第69巻，pp.52-63，日本教育心理学会，2021
- (32) 前掲(10)
- (33) 橋口誠志郎：「共同体感覚認知尺度の作成」，桜美林大学心理学研究，第8巻，pp.49-56，2017
- (34) 前掲(10)
- (35) 前掲(14)
- (36) 前掲(18)

- (37)内田由紀子・遠藤由美・柴内康文：「人間関係のスタイルと幸福感 つきあいの数と質からの検討」, 実験社会心理学研究, 第52巻, 第1号, pp.63-75, 2018
- (38)島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見陽：「日本版主観的幸福感尺度の信頼性と妥当性の検討」, 日本公衛誌, 第51巻, 第10号, pp.845-854, 2004
- (39)三島美砂・淵上克義：「学級集団, 児童・生徒個人に及ぼす教師の潜在的な影響力」, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 第145号, pp.19-29, 2010
- (40)向後千春：「アドラー実践講義幸せに生きる(知の扉)」, 技術評論社, pp.167-175, 2014
- (41)前掲(4)
- (42)永島大輔・小倉廉：「生徒のウェルビーイングを育む中学校理科指導法－生徒の将来への高手的な見通しの改善－」, 埼玉大学教育学部紀要, 第72巻, 第2号, pp.89-102, 2023

The Relationship between Well-Being and Social interest in Elementary School Children

Koshiro MEGURO* · Takuya TSURU** · Shinji AKASAKA***

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify how elementary school students perceive happiness in school life in relation to the improvement of children's well-being. Specifically, a hypothetical model of the relationship between a social interest and subjective well-being was examined using a structural analysis of covariance, and a textual econometric analysis of free descriptions of happiness in school life was conducted using KHcoder. The results showed a strong positive association between social interest and subjective happiness, indicating that children perceive the connection with friends as happiness. This study indicates that enhancing a social interest may improve well-being.

* Tochio higashi Elementary school ** Fujimi Elementary school *** School Education